

有生のものをガ格に取る。これが、基本である。「太郎には 妹が ある」という文の意味は、〈太郎には、妹という続柄の人物が存在する〉ということである。この場合の「妹」は、「花子」というような名前を持った、生きて呼吸している具体的な人間そのものではなくて、ただ単に、「太郎」と親が同じで、「太郎」よりも歳下の女を意味しているにすぎない。つまり、この場合の「妹」は、人間扱いされていないのである。

「ある」に対して、「いる」は、有生のものの存在を表わす動詞だから、ただ単にそこに存在するだけでなく、能動的に活動しているというイメージを含意しているため、(38)の意味を、たとえば、〈太郎はだらしな男だが、例のしっかり者の妹がついているから、なんとかやっけてくれる〉というようなニュアンスで解釈し、(38)の文が自然な文となるのである。

以上をまとめると、次のようになる。

Ⅲ 「ある」は、ガ格に立つものの単なる〈存在〉を表わす。

Ⅳ 「いる」は、ガ格に立つものが、生きて活動しつつ〈存在〉していることを表わす。

3. おわりに

基本的な語であるだけに、問題点が多く、議論の焦点を絞らざるをえなかった。「ある」「いる」に「もっている」を加え、さらに、英語の have と比較したら、〈存在〉と〈所有〉について様々なことが分かってくるだろう。

小論で、面白いことに気が付いた。それは、素性をうまく立てれば、有生の「弟」と無生の「弟」とをレキシコンの中に同音異義語として入れる、などということをしなくて済むということである。

言語経歴：1959年7月愛媛県八幡浜市生 4
歳～18歳松山市 18歳～東京都目
黒区

かつぐ・せおう・しょう・おぶう・だく・ だきかかえる・かかえる

酒井 恵美子

1. はじめに

いわゆる支持動詞群は従来各方言での意味記述および比較が行なわれており、^(注1)他の動詞群と比べれば比較的研究が進んでいる。

本稿では共通語におけるこの分野の語の意味記述を試みさらに、辞書の意味記述についてもあわせて検討を行ないたい。

支持動詞群としてここでは、「かつぐ」「せおう」「しょう」「おぶう」「だく」「だきかかえる」「かかえる」をとりあげる。これらの語群は上半身の一部を対象に接触させて対象を支持する動作をあらわす語群である。

まず、これらの語を支持する主体、支持される対象、支持する方法（支持する場所、手の使用等）の観点から比較する。原則的には比較する語はできるだけ多い方がよい。たとえば、語 a, b の比較により弁別の特徴〔α〕が分析される。a, b の比較ではここまでである。ところが b, c を新たに比較すれば〔β〕が分析される。この〔β〕も語 c との弁別に一役かっているわけ

であるから、b の意味記述としては〔α〕とともに欠かせない特徴である。しかし〔β〕は a, b の比較からは分析され得ない特徴でもある。とすると、原則的にはより多くの語との比較を行なうほどその記述はより詳細に、より体系的になってゆくと考えられる。

一方で、このような語の比較、分析から明らかにされるのは、各語間の差異であり、相似的部分は多くみのがされる。たとえ、このような比較から注意深く相似的部分を分析したとしても、その特徴がどの程度重要なものであるか位置づけることはできないし、極端に注意深ければ、微細な部分まで際限なく数えたてるおそれもある。先の七語の比較分析からも明らかにされるのは七語の差異である。共通部分と考えられる〈上半身の一部を対象に接触させて対象を支持する〉という部分は未分析のまま残ることになる。これがこの分析の限界でもある。今、この部分を〔支持する〕という特徴であると仮定し、〔支持する〕その内容には言及しないこととする。^(注2)

2. 分析

2.1 (支持する) 主体

まず、これら一連の動作を行なう主体について考えよう。

これら動詞の主体はすべて人、あるいは人に近い形状をもつものでなければならない。牛馬の荷物の保持・運搬動作にはけっして使用されない。しかし、この特徴は、これら語群に共通する意味特徴であるというよりは、これら語群のあらゆる動作から必然的にみちびかれるものであって、むしろ余剰の特徴である。つまり、これら動作をおこなうには以下分析するように、手、肩、背といった身体部位とそれらの運動能力が必要であり、それをみたまには人か人に近い形状が必要なのである。ということは主体をあらためて記述しなくともおのずと主体は制限をうけるのでここでとりあげる必要はない。

また、他の多くの方言にみられる主体が単数か複数かという特徴もここでは関与的ではない。

2.2. 対象

次に対象について考えてみよう。

「かつぐ」の場合、普通日常的には対象は無生物に限られる。このような動作を人に対してすることがないので人に対し使えるかどうか判定は難しい面がある。

(1) 子供を 肩にかついで 山道を登る。

(1)の例はいくぶん子供を物としてあつかっているようにも感じられる。しかし、子供に対し使えないというわけではない。日常的動作としてはあまりないが一応、「かつぐ」の対象は生物、無生物をとわないと考えられる。

これに対し、「せおう」「しょう」「おぶう」には対象により使いわけがある。

(2) 病人を せおう。

(3) *病人を しょう。

(4) 病人を おぶう。

(5) 荷物を せおう。

(6) 荷物を しょう。

(7) *荷物を おぶう。

これより考えれば、「せおう」は対象に制限がないが、「しょう」は物、「おぶう」は人に限られる。

(8) 子供を背負い子に入れて しょう。

「しょう」は(8)の例だと使えるが、これは背負い子を使用するからで、支持する対象は物と考えられる。

これに対し、「おぶう」の対象は人であるが、この時、支持する対象の胸と主体の背が接触するような形

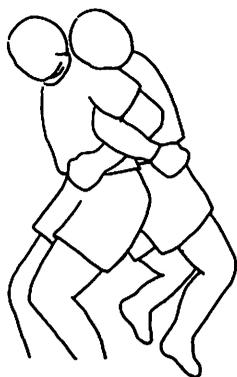


図1

でなければならない。人を背で支持する場合はそのような格好になることが多いが、仮に図1のように背中あわせに支持する場合は「おぶう」は使えない。もしいうとすれば、「せおう」であろう。とすると「おぶう」は主体の背と支持されるものの胸が接触するように支持しなければならない。そのような格好ができるのは普通人に似た形状をもつものに限られる。人形とか猿までなら可能であろうが、犬、猫には不可能である。このような形状をもつものに共通する特徴を〔人〕とすれば、「おぶう」の対象は〔人〕に限られる。

では、「しょう」にもう一度もどろう。「しょう」の対象は物であるが、動物はどうであろうか。もし、死んだ動物であれば使える。

(9) しとめた猪を 背中に しょう。

(9)の場合は物と同じにあつかえよう。猿のように人間に似た形状の動物を人のように背で支持した場合は「しょう」は使えない。生きている動物を背に支持することはないので、比較はできないが、動物の場合であっても荷物のように袋に入れたり、網でしばったりして支持しなければ、「しょう」は不自然である。よって、「しょう」の対象は無生物に限られる。

「だく」「かかえる」はどうであろうか。(10)~(16)は体の前面に接触する場合である。

(10) 子供を胸に だく。

(11) ??子供を胸に かかえる。

(12) ?子供を かかえる。

(13) ?本を だく。

(14) 本を かかえる。

(15) 小犬を だく。

(16) 小犬を かかえる。

(10)~(16)の例より考えると、「だく」は無生物には使いにくく、「かかえる」は人の場合は使いにくい。しかし、(17)、(18)のような例もある。

(17) 大事そうに 本を胸に だく。

(18) とっさに子供を胸に かかえた。

これならば、(11)(12)(13)よりは自然である。(10)~(16)にみられる一見対象の差を示すような例は実は支持のしかたに問題があると思われる。これについては2.3.3であらためて考察する。

最後、「だきかかえる」であるが、これは(19)(20)の例からわかるとおりある程度の大きさ重さであれば、対象に制限はない。

(19) 赤ん坊を胸に だきかかえる。

(20) 大きな荷物を だきかかえる。

2.3 支持する方法

2.3.1 支持する場所

(21) 肩で 荷物を かつぐ。

「かつぐ」の場合、肩は荷物の重さを支える支点である。「かつぐ」の場合はデ格的他に二格にもあらわれる。

(22) 肩に 荷物を かつぐ。

(23) 背中に リュックサックを せおう。

「せおう」の場合、背中は支点というよりは単に接触しているだけである。リュックサックの重みはむしろ肩にかかっているが、(24)は使用できない。

(24) *肩で リュックサックを せおう。

「せおう」「しょう」「おふう」は二格しかとらない。「だく」「だきかかえる」「かかえる」は、二格もデ格もとる。

(25) 子供を 両手で しっかり 胸に だく。

(25)の場合、両手は支持している部位で子供の重みは両手にかかっている。胸は単に接触している部分といえる。

ここでは、対象を支持し、その重みを主として支える部分と接触している部分とをともに考察する。

(26) 肩で 釣り竿を かつぐ。

「かつぐ」は肩で対象を支える。大きな荷物等で背の一部に接触していても(27)は不自然だ。

(27) *大黒様は 大きな袋を背中に かついでいる。

肩で対象をささえていれば片方でも両肩でもよいが、リュックサックのように背中の方にさがってしまうと「かつぐ」は使えない。またてんびん棒のように肩を支点として前後、左右に荷物を釣り下げてもよい。

(28) てんびん棒を 肩に かつぐ。

(29) もっこを 肩で かつぐ。

(28)(29)は荷物は肩より下であるが、(30)のように肩より上であってもよい。

(30) 皆で みこしを かつぐ。



図2

しかし、肩を支点とするといっても振り分け荷物のように胸や背に対象が接触すると「かつぐ」は使えない(図2)。これは対象が胸や背に接触することにより、肩以外の場所で対象を支持しているようにとらえられるからである。「かつぐ」はあくまで肩で対象を支持しなければならず、それ以外の部位への接触も原則的にはない。

「かつぐ」の肩に対し、「せおう」「しょう」「おふう」は必ず背を使用しなければならない。

(23) 背中に リュックサックを せおう。

(31) 背中に リュックサックを しょう。

(32) 背中に 赤ん坊を おふう。

「せおう」「しょう」「おふう」ともに必ずしも肩に重さがすべてかかっている必要はない。図3は「せおう」「しょう」が、図4は「おふう」が使える。重要なのは主体の背と対象が接触していることである。対象が下方にずれて腰のあたりまで下がってくる図5だと「せおう」「しょう」は使えない。

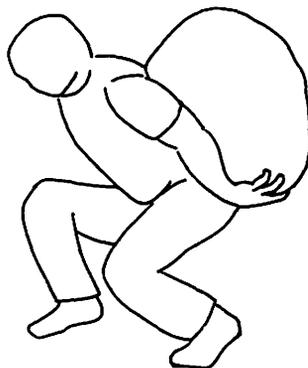


図3



図4



図5

「かかえる」「だく」「だきかかえる」はどうであろうか。

- (33) 本を胸に かかえる。
- (34) 子供を胸に だく。
- (35) 子供を胸に だきかかえる。
- (36) 本を脇に かかえる。
- (37) *子供を脇に だく。
- (38) 子供を脇に だきかかえる。

(33)~(38)の例より、「かかえる」「だきかかえる」は胸か脇に接触させることがわかる。「だく」は胸で、脇に接触させると使えない。図6のように接触のない場合や、図7のように腹部まで対象がずれた場合は「だく」「だきかかえる」「かかえる」は使用できない。

図6



図7



2.3.2 手の使用

次に対象を支持する際の手の使用について試してみる。「かつぐ」は(22)(26)(28)(29)をはじめとして、鉄砲、俵、材木などすべて対象を支えるために手を使用している。安定して持続的に対象を支持するためには手を使用することが必要であるが、この手には対象の重さはかからない。日常生活をざっとみまわしても手を使用せず肩で対象を支持することはない。仮に曲芸師が肩に大きな荷物のかつぎあげ、バランスをとりながら手を離れたとすると、この場合、「かつぐ」は使えるだろうか。普通は「かつぐ」は使わない。「かつぐ」には手の使用が必要なのか、安定した支持が必要なため必然的に手を使用しているのかはわからないが、現実には手の使用、非使用で対立する動作がないので手の使用を記述するとしても二次的な特徴として記述すればよいと思われる。つまり、支持する場所〔肩〕を記述すれば自動的に手の使用が必要となるのである。

「せおう」「しょう」「おぶう」は背を使用するが、手を使用する必要はない。

- (39) 背負い子を せおう。
- (40) リュックサックを しょうって 両手には風呂敷包みをさげている。

(41) 負い紐で 子供をおぶい 家事をする。「だく」「だきかかえる」「かかえる」は手を使用しなければならない。胸に接触するように負い紐を使って支持したり、そのための道具を使って赤ん坊を支持している姿(図8)もしばしばみかけるが、これには、

図8



「だく」「だきかかえる」「かかえる」は使えない。必ず手で対象を支持しなければならない。その時の手は対象にまわされ、それを囲い込むようにしている。それは脇を使用する場合も胸を使用する場合も同様である。

2.3.3 接触の状態

それでは、「だく」「だきかかえる」「かかえる」のちがいは何であろうか。

今までの分析を整理すると、支持する場所は、「だく」は胸、「だきかかえる」「かかえる」は脇か胸で、三語とも手を対象にまわして囲い込むように使用することがわかった。これだと「だく」と「かかえる」の差は明らかになっていないし、(15)(16)のような例には意味差がないことになる。しかし、直感的にこの三語にはもっとはっきりとしたちがいが感じられる。

図9



図10



(15)(16)も再び考えてみよう。(15)と(16)には支持する動作のちがいが感じられる。(15)は図9、(16)は図10の動作である。(15)と(16)のちがいは子犬のむきだけではなく、(15)が胸に密着させてしっかり支持しているのに対し、(16)

はややぞんざいな印象がある。次の(42)(43)も同じ差が感じられる。

(42) 赤ん坊を だく。

(43) 赤ん坊を かかえる。

(43)が体の前面を使用している場合だとすると、いく分物を支持しているような感じがある。これは(18)のような状況だと「かかえる」がより自然に感じられるのと共通する。

「だく」の方も同様で(17)のように大切な物や好感をもつものであれば人以外でも「だく」は使用しやすい。次のような例もある。

(44) 石を胸にだいて 入水した。

(44)の場合も石をしっかりと支持している様子が「だく」との異和感をなくしている。

以上より、「だく」は胸に対象を密着させて支持し、「かかえる」は密着させずに支持することがわかる。

では、「だきかかえる」はどうであろうか。

(45) 小犬を だきかかえる。

(45)は図9、図10のどちらにも使える。この例だけでなく、「だきかかえる」は、「だく」「かかえる」の両方にわたるひろい用法をもっている。このどちらかと差のある例は見出せなかった。

2.3.4 [支持する]

以上主体、支持する方法、対象について考えてきた。2で述べたようにこれらの語の共通部分(上半身の一部を対象に接触させて対象を支持する)という点については最初から前提としてその内容にふれないできたが、ここで若干の修正をしたい。それは、これらの語

の支持のしかたに差異がみとめられるからである。

まず、「かつぐ」「せおう」「しょう」「おぶう」は対象を完全に支持している。対象はどれも地面からはなれ、主体の身体の一部だけで支持されている。身体の一部は対象の重みすべてを受けている。

それに対し、次のような例が「だく」「だきかかえる」「かかえる」にはある。

(46) 男が女を胸に だく。

(47) ベッドの病人を だきかかえる。

(48) 突然の地震に とっさに我が子をかかえ身をふせた。

(46)は男女が立ったまま抱擁しあった場合、(47)は病人の上半身だけをおこし、手を上半身にまわした場合、(48)は両手を子供にまわし、そのままうつぶせた場合、ともに主体は対象を持ち上げているわけではない。ただ、対象を自分の方へ引きよせ身体の前面に接触させているだけである。

このように支持する対象が完全に主体によって支持されず、その一端が地面につき、対象それ自身の重量が主体ではなく他のものによってになられることは、「かつぐ」「せおう」「しょう」「おぶう」にはない。「かつぐ」「せおう」「おぶう」「しょう」に共通する特徴——重量を完全に支持する——を〔支え持つ〕とすると、「だく」「だきかかえる」「かかえる」に共通する特徴——対象を支えているだけで完全に支持する必要はない——を〔支える〕とし、この二つを区別することにする。1で述べた仮定に若干の修正を施すことになる。

3. 分析のまとめ

ここで分析のまとめを行なう。

	主 体	対 象	支持する場所・接触する場所		接 触	支持の内容
				手の使用		
か っ ぐ	(人)	物 人	肩	(手をそえて)	背に胸を接触させて 密着させて 密着させず	支え持つ
せ お う	(人)		背			支え持つ
し ょ う	(人)		背			支え持つ
お ぶ う	(人)		背	手を対象にまわし 手を対象にまわし 手を対象にまわし		支え持つ
だ く	(人)		胸			支える
だきかかえる	(人)		胸または脇			支える
か か え る	(人)		胸または脇			支える

※ () は余剰の特徴 空欄は非関与的であることを示す。

4. 辞書の意味記述

3.の分析結果をもとに辞書のための意味記述を考えよう。

辞書は使用者や用途によって様々な記述のしかたがあるものでいちがいに良し悪しを決定できない。意味分析に忠実だけでは用語等の難解さが欠点となる。類義語でただ言いかえただけと欠点を指摘される類の記述がかえって実用的であることも多い。

ここでは使用者や用途は限定せず、意味記述として最低限のものでできるかぎり分析結果を反映するようにしたい。

「かつぐ」

最低限必要な記述はまず関与的であり余剰的ではない特徴である。3.より拾うと「肩で支え持つ」である。この記述だけで肩以外のところで接触しないという意が伝わるであろうか。岩波1979のように「肩にのせて」の方がよいかもしい。「支え持つ」は語としては一般的でないが、「完全に対象を支持する」という内容はあらわしている。

〈肩にのせて支え持つ〉

「せおう」

「背で支え持つ」となるが、これでは牛馬が背中に荷物をのせているのと区別できない。そこで厳密には「のせる」との意味の比較分析をする必要があるが、ここでは主体を明らかにすることにより区別する。

〈人が背で支え持つ〉

「しょう」

「物を背で支え持つ」となるが、これも「せおう」と同じく主体を補う。

〈人が物を背で支え持つ〉

「おぶう」

「人を背で背に胸を接触させて支え持つ」となるが、これも「せおう」「しょう」と同じく主体を補う。「接触させて」は平易にした方がよいだろう。語順も若干変更し、言葉を補う。

〈人がその背に相手の胸をつけるようにして支え持つ〉

「だく」

「手を対象にまわし胸に密着させて支える」となる。対象というのは辞書にはむいていないので「人や物」とした方がよいだろう。「支える」としたために(4)のような例を想起してしまう結果になったかもしれない。しかし、これにかわる表現がみつからない。岩波1979は「包み取るように保つ」という表現を使っているが、内容が明確に伝わらない。「密着させて」も今少し表

現的でないが、「かかえる」との対立を明示するために残す。

〈手をまわし人や物を胸に密着させて支える〉

「だきかかえる」

「手を対象にまわし胸または脇に接触させて支える」となる。「だく」と同じく「対象」を「人や物」にする。あと「接触させて」も「つけて」とかえた方がよいだろう。

〈手をまわし人や物を胸または脇につけて支える〉

「かかえる」

「手を対象にまわし胸または脇に密着させず支える」となる。「対象」は「だく」と同様であるが、問題は「密着させず」という点である。岩波1979は「落ちない、また離れないように」と説明している。この点については他にいい表現を捜す必要がある。

〈手をまわし人や物を胸または脇に密着させず支える〉

5. おわりに

意味分析では、「だく」「だきかかえる」「かかえる」の分析がまだ不充分であった。1.で述べた観点からは七語という数はまだまだ少ない。それがこのような不充分な結果を生んだのかもしれない。

辞書の意味記述はもう少し説明的にすべきかもしれないが、簡潔さの方を優先する結果となった。ことに「だく」以下三語は表現をさらに的確にする必要がある。後の課題としたい。

なお茨城大野林正路氏には「保持、運搬動作における意味体系調査表」を参考にさせていただいた。記して深謝いたします。

〈注1〉 本堂1976, 高橋1977, 野林1980, 1982—1983など。

〈注2〉 2.4 で若干の修正をする。

〈注3〉 人により「せおう」「しょう」には個人差がみとめられ、(3)の例が可能な人もいる。それらの人々にとっては「せおう」「しょう」の意味差は文体差を除けば存在しない。

〈注4〉 図6の例で「だく」の使用できる人もいる。それらの人にとって「だく」は胸部との接触を必要とせず、手を使用し胸部より上、頭部より上にあがらない程度にもちあげれば充分なのである。

〈注5〉 「だく」には次のような例がある。

(49) 男が女の肩を だく

これは並んだ男がそのまま女の肩に手をまわした状態をさすが、これは、密着した接触をあらわす「だく」が親愛の情を余剰的に含むようになり、このような表現をうんだと考えられる。手を対象にまわすという動作を「だく」というわけではない。この類の例はこれだけで、たとえば、「胸をだく」とか「腰をだく」のような表現はない。ここでは慣用的表現として別に扱う。

<注6> この例に「かかえる」を使用できない人もいる。それらの人々にとって「かかえる」は〔支え持つ〕特徴を持っている。

言語経歴：1955年3月徳島県名西郡石井町生
0～18歳徳島県名西郡石井町 18
歳～23歳高知市 23歳～26歳東京
都品川区 26歳～横浜市

さがす・さぐる

沼田善子

1. はじめに

ここにあげる「さがす」と「さぐる」の二語は、どちらも何らかの目的をもった意志動詞である。国研1964では、この二語を「2.306₂探求」に分類している。また柴田編1976では、この二語とさらに「あさる」を含めた三動詞について「何かを発見しようとして努力する」(p. 29)という共通点を指摘している。しかし、共通点を持ちながらも、これらの語は、具体的な用法の上で、言い換えのできない場合があり、互いに意味の上で重ならない部分を持つ。そこで、「さがす」と「さぐる」の二語について、両者の意味の差異を考えてみたい。

2. 分析

2.1. 構文

「さがす」「さぐる」は共通して、基本的には以下の構文をとる。

- (1) NP₁ガ NP₂ヲ さがす/さぐる。
- (2) NP₁ガ NP₃ヲ さがす/さぐる。
- (3) NP₁ガ NP₃デ/ニ NP₂ヲ さがす/さぐる。
- (4) NP₁ガ NP₄デ NP₂ヲ さがす/さぐる。
- (5) NP₁ガ NP₄デ NP₃ヲ さがす/さぐる。

NP₁は、「さがす」「さぐる」両動作の動作主体を示す。NP₂は、対象物を示す。NP₃は動作の行われる場所を示し、NP₄は手段あるいは道具を示す。以下に各々の構文について、具体例を示す。

- (6) 太郎が マッチを さがす/さぐる。
- (7) 太郎が 暗室を さがす/さぐる。
- (8) 太郎が 暗室で/に マッチを さがす/さ

ぐる。

(9) 太郎が 手で マッチを さがす/さぐる。

(10) 太郎が 手で 暗室を さがす/さぐる。

なお、NP₃が格助詞「に」を伴う形は文語的であり、稀である。(8)は「暗室に」という形では、若干なじみにくいだが、次の様な例がある。

(11) 花子が 駅の人込みに 母を さがす。

(12) 花子が その記事の中に 真相を さぐる。

以上、「さがす」「さぐる」がとる基本的構文をあげた。

ところで、両語は、この他に、ト格やカラ格名詞句を伴う構文をもとり得る。しかし、カラ格やト格については、両語の間に示差的特徴を見い出せないため、本稿では考察を省く。ただし、いわゆる起点としての場所を示すカラ格名詞句は、テンスと関係して、両語の意味に興味深い影響を与える。従って、これについては、「2.5. さがす・さぐるの意味に影響を与えるもの」の項で考察を加える。

さて、以下では、先の基本的構文におけるカ格、ヲ格、デ格にたつ、動作主体、対象、手段(道具)、場所を示すものについて、順に考察を行う。

2.2. 動作主体

「さがす」「さぐる」の動作主体は、人間、動物等の有生名詞句か、または、人間の集まった団体や機関を示す名詞句である。これは、両語が、目的意識的行為を示す意志動詞のためである。

ただし、動作主体を示すカ格名詞句の位置に、ロボット、ヘリコプター等の機械や、手足、目といった人間の身体部位である無生名詞句がくることがある。

(13) ロボットが ボールを さがす。